

卷明君、言長於曲。轉角含商。音律善。破碧雪。調高。(曾益)

豈画越而索歌耶。(董憲策)

似以明妃四長在手辰玩。(錢澄之、王注所引)

長翻蜀紙乃録曲也。卷明君書于册内。蓋以明君爲奈府相和歌。吟歌四曲中王明君之曲。(邱象隨、王注所引)

曲調明君、音調商角。固後房爲備之事。(姚文燮)

二句是美姬之技藝。上言其善曲。下言其善歌。等卷字恐有誤耳。(王琦)

○長翻蜀紙卷明君 蜀紙とは善紙をいう、蜀は紙の名産地。明君と曰王昭君、蜀の文帝司馬昭の諱を避けて昭を明と改む。奈府相和歌の吟歌曲の中にある王明君曲をいう、この曲詩が紙にかいて巻いてある、翻とはそれをくりひろげること。これけ文字通りにみたのである。

王注では呉注に依て「翻は番なり」とし、長番とは長幅のことだといひ、此句は王昭君の面をかくことだといひ、それでは卷字がおかしくないか。○角・商 音律の五音中の名。○破碧雪 雪を退め塵を飛ばすの意、美音をいう。(鈴木虎雄)

さて、入矢氏の文。

王建の「畫妓を觀る」という詩……は、王昭君の悲劇の物語を胡人の女講釋師が語るさまを詠んだ詩として有名であるが、李賀にもそれがあつた。「長翻蜀紙卷明君、轉角含商破碧雪」(許公子鄧姬歌)というものがそれである。「卷明君」とは、明君つまり王昭君の物語が畫卷

に描かれていることをいう。それを繰り磨げながら語り且つ歌ったわけである。中国文学報 第三十三冊
この文と鈴木注とでは、解釈で相違しているわけではなさそうである。だが、わたしは、女講釈師と函巻の二語を得て、はじめにイメージが結んだのだ。おのれのことりの鈍さにあきれる。

▲雅記・51V 潘雪帆

1973.5.13.

一九五九年秋、わたしは、清の杭世駿の「錢塘の詩人潘雪帆の墓は笏岡に在り、往きて尋めれども得ず」という詩について小文を書き「斜陽」と題して雑誌『大衆』十月号にのせた。その文の末に、次のように記した。

うたわれた潘氏について、わたくしもいろいろ調べてみたが、知ることができなかつた。「国朝詞録」巻十八にのせる潘雪赤、字は夏珠なる人が、あるいはこの雪帆でもあろうか。「蘇幕遮」一首があつて、杭氏の詩にいう「ひぐらし」といふよにすすりないている」の語にふさわしいようにも思われる。だが、このような憶測も、むだであらう。「往きて尋めれども得ざる」ことこそ、落魄の詩人潘雪帆にふさわしいのであろうから。

一九七二年、拙著『むげん詩集』ハカラー版・中国の詩集・10にこの詩を入れ、解説に右の文を節略してそえた。

きよう、近人楊鍾義の『雪橋詩話』を読み、卷一に次のような記事を見出した。

錢塘の布衣潘雲客・問奇、字は雪帆、詩を田梅岑と合刻す。田のを『埋照集』といい、潘のを『拜謁堂草』という。……

引く詩に次のようなものがある。

一徑如蛇入 蒼藤手自分 石生都畏奇 嵐起不成雲 覓路經熊館 揮弓散鹿羣 日暎逢鬼唱

疑是鏡家墳 (誦蘆谷)

鬢冷鷹侵雨 園燈引露 破扉猶入燕 老樹自生花 (梅岑)

「ひぐらしといっしよになく」詩といえなくはない。だが、この幽澁冷萌は李賀詩と同じ方向にあるものといえないか。あるいは孟郊と李賀の間をめざすものといえようか。

名がわかったので、徐世昌『清詩匯』(晚晴簃詩匯)をみると巻十七に七首かかげ

潘問奇、字は雲程、又の字は雲客、号は雲帆……

とある。楊氏のいうところとすこしちがうが、あるいはどちらが字でどちらが号なのか、わからなくなっているのかもしれない。

この外、清の卓尔堪の編輯した『明遺民詩』巻六に九首、近人郭之誠の『清詩紀事初編』巻一に四首かかげる。

『拜鵝堂草』を目錄類でさがしてみたが、わたしの見ることでできる機関にはなさそうである。潘氏に関する記事では郭氏のものぐわしい。原文の双注をここでは単行とし(一)でくくる。

潘問奇 拜鵝樓詩集四卷

潘問奇、字雲帆、錢塘人。家曾稟諸生、游食四方。集中有年可紀者。戊申(崇禎七年)客絳歸。庚戌(九年)客大梁。甲寅(十三年)客昌平。丙辰(十五年)客海陵。戊午(十七年)

歸晉陵。甲戌（三十三年）自京師南歸。乙亥（三十四年）客揚州。知府傅澤洪爲刻此集。兼爲江都田登刻埋照集二卷。題曰二家詩。澤洪有遺。澤軍旗人。喜吟咏。能爲此舉。且欲爲田登買田歸老。仕官中亦頗難得也。問奇行事不具。阮葵生茶餘客話云。先徵君鶴緱先生。手錄同社（應社）偕和詩。內潘雪帆七律最多傑作。雪帆客居淮上。與石霞舉紫嵐劉昭華爲忘形之文。後客死天寧寺。揚州守傅澤洪葬之平山堂側。爲文誌其墓。查二時書丹。遺稿甚富。石氏舊有藏本。此集無早年詩。澤洪作序云。全集有待。不知以何時故去。庚午（康熙二十九年）除夕詩云。身到三更更六旬。是生干嶽積五年。至是已六十四歲。母妻尚在江南。不知何以卽葬揚州。其詩意境深厚。節調沈雄。尤工七律。秋柳二首。論者謂非神寄詠遠在新城之上。唯戊午雜興。頗及時事。餘多異代黍黍之悲。如燕京感舊。讀吳梅村宮管蕭史青門引感而有作。今日傷甲乙閭南都事。蕪城弔史可法。玉容歌爲長平公主作諸詩。幾欲與婁東爭帝。嘗客昌平。有天壽山。望天壽諸陵。思陵。營平雜感。戊辰（康熙二十六年）再謁長永諸陵詩。嘗戀先朝。至祝髮大驚。疏又欲爲增孝陵。問奇客感應金三十年。與僧無異。而詩中無一飯心話。知祝髮之說。明以寄其悲憤而已。

崇禎五年は一六三二年。康熙三十四年は一六九五、もしこの年に死んだとすれば六十九歳だ、たわけである。「清詩匯」の「詩話」によれば「二家詩」の刊行は、康熙丁亥、すなわち四十六年へ一七〇七の七）だという。不遇の詩人の世話をし、その死後に遺稿を刊行することまでした、傳澤洪なる人のことをくわしく知りたいが、これにも時をかさねばならないようだ。

「四明書」に周容の著作のうち文存四卷・詩存六卷・詩話一卷と外紀一卷を『春酒堂遺書』として収める、詩存卷三に「拜翁亭」と題する作がある。

結茅方丈地 把膝浦爲僧 碧□□高樹 丹竈落古藤 年華酬道路 心事罷賓朋 爲鑄黃金像

如來是少陵

題の拜翁亭は、八雜記・51 V に書いた潘問奇のことらしい。詩存卷三に次の三首が在らぶ。

夜飲朝陽曲

舞罷曲終人已醉 睡星難透重簾翠 金釵銀甲墜不收 禿襟半臂覆筵後 花氣生煙護綺樓 銅盤未減鏡蟾流 秦宮曲廊共誰語 金丸打卻啼鴉去

神伎

幽林曉暈陰雲合 狐狸吹火作人立 巫女邀神神致答 老鴛一聲風颯颯 將軍貌赫騎白蜺 赤帽抹額衝火齊 小姑娘髮橫雲鏡 手折瓊花翠扇低 倚街植板虎華鞞 旌搖雉尾石馬嘶 魚鱗炙盡雙戲危 神噓神喜巫自知 萬金千錠萬未提 車道庭階紫微迷 小姑娘解繡帶垂 含笑不言微月西 曉來雨過亂鴉啼 黃金不飛隨作泥

致酒篇

寂寥高天呼不得 空拳推掣金雞翼 好花枝映綠楊紅 自持蒼髯失顏色 我朋阿房饒樂東逡迴 夜趨王翦下蓬萊 海石血痕猶未滅 童子笑指咸陽灰 我有愁金千萬錠 欲買丹砂句漏井

これらが李賀の「夜飲朝眠曲」3136(20780)「神絃」4209(20853)「致酒行」2100(20744)を
本歌取りした作品であることはいうまでもないだろう。

詩話に次の三条がみえる。(一)内はわたしが加えたものである。その第一条。

畏吉の詩は(圃)風・(離)靡に原本し、心を漢・魏に留む。その唐ひとの諸調を視るや、
夷然として屑しとせざらんと欲す。天をしてこれに年を副え、進んで章法を求めしめば、
まに(鮑)明遠・(謝)玄暉と席を争わしめん。余その佳なるものを録するに、「感賦」に
おける「合浦」(其一)「題趙生壁」「京城」絶句の全章の外、「不知船上月、誰掉滿溪雲」
(始爲奉礼憶昌谷山房)「長卿懷茂陵、綠草金石井、彈琴看文君、春風吹髮影」(詠懷)「江
頭榕樹香、岸上蝴蝶飛」(追和柳惲)「沙頭敲石火、燒竹照漁船」(南園其十三)「今夕歲
華落、令人惜平生、心事如波湧、中生時時驚、翔客眼白馬、劍弔懸兩纒、俊健如生猿、肯拾
蓬中管」(申胡子筍栗歌)「長安夜半秋、風前我人老」(感賦其三)「天遠星光沒」(送秦
光祿北征)「夜遠燈焰短、腹熱小屏深」(嘲謝秀才其三)「由書燈光薄、有寒藥氣濃」(昌
谷詠書示巴童)「蜂語繞遊鏡」(雜忘曲)「燕語語簾鈎」(寶公閣書蝶曲)「人生有窮拙、
日暮聊飲酒……逢露作檉楸、得氣爲春柳」(贈陳商)「手持白鸞尾、夜掃南山雲」(仙人)
「京國心爛熳、夜夢歸家少」(春歸昌谷)「心事填空雲……襄王与武帝、各自游青春」(自
昌谷到洛後門)「夢中相聚笑、覺見半牀月」(秋涼詩)「風吹沙作雲、一時凌壺水、天白水

如練・甲系双串断、行行莫苦辛、城月猶殘半」(摩多楼子)「塞長連白空、遙見瀑旗紅……
 風吹枯蓬起、城中嘶瘦馬」(平城下)「爲有傾人色、翻成足起羞」(綠水詞)「何物最傷心、
 馬首鳴金環、野色浩無主、秋明空曠闊」(送曹仁實兄弟入關)「胡角引北風、薊門白于水、
 天含青海道、城頭月千里……曠北天充尽」(塞下曲)「乘船鏡中入」(月浪濤篇)「無人爾
 自春、草渚鴛鴦暖」(經沙苑)、起句にいう「星尽四方高」(感詠其四)また「月落大梁上」
 (石城曉)また「九月大野白」(自昌谷到洛後門)、結にいう「求長安車轡断、中有梁蘭旧
 宅石崇故園」(相勸酒)等の句のごとき、初と鬼氣なく、何ぞ古人に遜らん。その歌詩の長
 調の、古今のひとの常に感誦するところとなりしものは、余はいわざるなり。よいかは須溪
 の言、いわく「落筆、細読してまさに作者の心を用うるを知る。杜牧のただ二三の歌詩を取
 るのみにして止むしはいまだ長吉を知らざるものなり。その理は(離)騷に及ばすと謂える
 は非なり。またいまだ必ずしも(離)騷を知らるにあらざるなり。更に(離)騷を僕ならずし
 めんと欲するも、また非なり」と。須溪は真に長吉を知れるかな。(離)騷もまたいすくん
 ぞ僕とするを得べけんや。「真はみのすから一家を成す」と謂うに至、ては則ち誤まれり。
 長吉はすなわち未だ家を成さざるものなり。「おのすから家をなす」ものにはあらざるなり。
 これは、深切に李賀を理解したことばといえるだろう。周氏の挙げなかつた句でぜひ採りたい
 ものがたくさんあるが、それは好みに關することだ。周氏の指すものは、李賀の誓句と決定しう
 る。最後の「一家を成す」についての論議は、さきの「天をしてこれに年を副文……」とあわせ

て考えれば、詩人としては未完成だった、といっているようにとれる。だが、劉須溪が「弱の長するところは理外にあり。(詭弁家) 惠施の堅白(論)のごとし。ただ人情に近からざるをも、てす。しかして聾者は感い、いずくんぞこれ弁となさんとおしへり。眼前の語・衆人の竟のことは、長吉をまたずしてこれを能くせん。これ長吉のおのずから一家を成せるゆえんか」ということばに對して、周氏が「家を成さず」と駁するの^{たから}李弱は「理外」や、詭弁^{長吉のたは}はじめて独自性を主張しようとしている詩人ではない(むしろ詩の本道をゆくものだ)、と言おうとしているようにもとれる。さて、第二条。

「高軒過」の注にいう「弱は七歳にして詞章を能くす。韓愈・皇甫湜いまだ信ぜず。その家を過り、詩を賦せしむ。筆をとつてたちまちなる。なづけて高軒過という」と。しかれども詩にいう「飛眉書客感秋蓬。誰知死草生華風」は、あに七歳の児の語ならんや。おもうに、二公、その七歳の時すでに詞章をよくせしを聞き、こは、これを過言せしのみ。高軒を賦せし時にはあらざるなり。

これらもまた、すこぶる鋭い、そうして、きわめて正当な意見であるように、思われる。第三条。余は最も恨む、詩を言う者の、人の單詞隻句を拈^{しりぞ}ぶことを。しかれども、長吉においては、しかせざるを得ず。

李賀の詩を愛惜する者は、みなこのことばに同感し、かつ微苦笑するであろう。

▲雜記・53V 史雪汀注李長吉詩 続

1973.6.24.

清の史雪汀に李賀詩の注のあることをA雑記・2Vにかき、史氏の名が「崇」であること、全祖望の知人のひとりであったことなどをA雑記・23Vにかいた。A雑記・52Vで紹介した「春酒堂遺書」の「詩話」の説明に「任沛齋臨軒寫本」とし、その下に双注して「史雪汀李長吉詩注・徐鑄城四明詩助に引くところをもつて校過す」という。「春酒堂詩話」の李賀に関するものは三条にすぎず、史氏の注・徐氏の詩助が、その全部を引くのかどうかも知らぬが、その見識のすぐれることはA雑記・52Vにのべた通りである。史氏が李賀の詩注を書いたとき、これを引いて左祖したのか、駁撃したのか、はわからぬが、いずれにしてもこのような卓見を送んで引いた人ならば、他にもわたしたちにとっての初見の李賀評や札記のたぐいを収録しているかもしれない。「春酒堂遺書」總目の後に序文をかいているこの遺書の蒐集者馮貞祥は、蒐集編集のち四年の辛酉二月に「四明叢書」刊行者が遺書を編入したいと申入れたことを記している。そうして序文の年次を壬申と記す。壬申は「四明叢書」初刊時の民国二十一年（一九三二）であろう。それならば史雪汀の注した李長吉詩は一九三二年には、少くともその十四年まえには確實にあったのだ。いまでもあるのだろうか。ないのだろうか。

同じ叢書に史氏の「審定風雅遺音」二巻が収められる。詩経の音韻に関する史氏の研究文紀的が刪潤したものだ。紀氏は序文で雪汀が古音を知らぬという。だが、紀氏もかならずしも古代の音韻にくわしくはなかつたらしい。

六月十一日 未見の山田國夫氏から「孟郊詩・賦 寒露吟抄」(研究紀要 第七集別刷 東海
 高等學校教育文化研究所 一九七三年五月十日)と「へ章莊・秦婦吟」(46・8 執筆、誌
 名、発行所発行年月は記されてない)を贈られた。孟郊・章莊は、かつて玩談し、だいぶなが
 らくごぶさたし、近ごろまた読み直すつもりで、孟についてけ手許の石印本と大安が影印した本
 と文字をつきあわせているところであり、章については江駿平『孟郊詩校注』を押し入れから引
 き取り出して机辺において直後だったので、この惠投はまったく奇縁だ。

孟郊をそしつた詩として名高い蘇軾の「詠孟郊詩二首」(その一を引ぎ次のようにいう。
 孟郊詩に対する評価のうち、その措辞に関するいくらかを除いては、韋念の「蘇士」詩を以
 じめとして、彼に親交せる同時代人へ曹處・張籍・李觀等への、絶讃にも似たものに、かえ
 って疎ましさで文致するのに比して、この冷やかな視線を投げかけてくる蘇の評にこそ、
 郊詩に對して何ほどの傾斜しがちな見いがかげり、潜んでいるように思われてならない。
 我 孟郊の詩を憎むも復た 孟郊の語を作す人前記「詠孟郊詩」その二V、という句に、
 蘇の歪折した心情がにじみ後身する。……郊の詩には、たしかに拒絶せずにはおられない、
 あまりにも酸寒としたものの、纏り言めいた色あいがある。それは、まさに「讀む人をし
 て悔あらざらしむる」滄浪詩話Vのものなのである。がしかし、それと裏はらに、何か奇妙
 に、耳底に深く暗く響かい、しそやかな、それでいてどうにもこびりついて離れない重い底
 音がある。……

孟郊詩の魅力の中核を言ひあててゐる。とわたしはおもう。

わが怨念は しみて染つた まだら竹

恨みにからむ 竹の根は 地中深く わだかまる

地表に 伸びもやらぬ 筍は

土中深く ひそみて 口や 恨みの液に 染めて 泣く

妾恨比斑竹

下盤類窳恨

有筍未出土

中已含淚痕

(脚怨)

二の詩を讀むと、反射的に李賀の「昌谷北園新笋」の「篠落長竿刺玉開 君看母笋是龍材 更容一夜抽千尺 別却池園數寸泥」を思い出した。同じ竹をうたつても、また土を出めものど一夜に千尺を抽くものと、その遠いのけなけだしさにおどろく。「露重煙痕千萬枝」といってもその恨みは「龍材」の青年のさわやかな恨みで、孟郊の屈盤した老嫗とはちがう。わたしはどちらにもひかれるが、世路の苦難を長くなめた人が孟の詩によりも孟郊の作にひかれるだろう、という気がする。

天 寒く 色 蒼く しんしんと牙文微り

北風荒れて すがれた桑梢の 木末の泣きさけぶ

厚き氷け すじひく裂け目の 兆なく

冬の日の みじかき陽さしは 冷たくにぶい光を放つ

石を敲けど 火け燃えず

天色寒蒼蒼

北風叫枯桑

厚冰無裂文

短日有冷光

敲石不得火

きびしき冬の陰の気は ゆらぐ陽氣を奪つて しんしんと 地殼の底に

杜陰正奪陽

134 x 411

調苦く （苦）もつれる言に

調苦竟何思

凍るべに 冷えびえと わずかに凍れる 歌ひとつ

凍吟成此章

李賀の「北中寒」（一方黑照三方紫 黄河冰合魚龍死 三尺木皮斷文理 百石強車上河水 霜

（苦寒吟）

花草上大如錢 揮刀不入迷蒙天 爭看海水飛凌噓 山深無磬玉虹懸」を連想するか、やはり、ヤ、
キの両者の作に感じたものと同じ差異をうけとらざるを得ぬ。しかし、賀が孟郊の詩からかなり
多くを学んでいるだろうことは、拙稿「帰郷」(方向6)で示したが、山田氏の訳文を読んであ
らためてそう感ずる。

「秦婦吟」の訳稿を読みかけ、韋莊の雲に目を通しておこうと思つて江氏の校注をひらいた。

清瑟怨遙夜 繞弦風雨哀 孤燈聞楚角 殘月下章臺 芳草已云暮 故人殊未來 鄉書不可寄

秋霜又南迴 (章臺夜思)

韋氏の詩風を「明潔深秀、尽く少陵の体法を得たり。義山の工麗あつてしかもその脆脆なし。
飛卿の清切あつてしかもその軽脆なし」(李漁叔)といつてもよいが、「白樂天の体法を得た」
とつづめてい、てもさしつかえないだろう。けれども前引の「繞弦風雨哀」には李賀の「諫歌殘
恨絃」(潞州張大宅病過 3133 2071)の影がさしているような気がする。

扶桑已在渺茫中 家在扶桑東更東 此去與師誰共到 一船明月一帆風 (送日本國僧敬龍歸)

の「東更東」は「家住錢塘東復東」(送沈亞之賦 1011 2065)を学んだのではないか。「誰家樹屋紅梅折」へ途中望雨憶歸「玉欄便古壁枝紅」(竇公子)の「壁」字は賀の「露壓煙啼千萬枝」(雪谷北園新詠 2104 20748)に由来するのではないか。

晩唐の詩人が李賀を学んだことはすでに定論となっていてはいるが、一人ひとりの一々の作についてダメ押ししておくことの必要を、さらに感じる。

山田氏の「秦中吟」訳は

中和三年 春も名残りの三月 / 洛陽の街のはすれ 乱れ散る花は雪にもまがうに / 路行く人のすがたは絶えはてて / 絲楊の枝も なせにか生きのいのちを失い 香ぐわしい女人の車馬も行きがわす すべて虚ろの昼下り……

といった調子ではじまる。氏みすからのいうように「詩句のそれぞれの行間に潜むイメージの自在にふくらみ、展開して行くにまかせた」もので、『太平記』を読むような感じがし、詠り物としてのこの詩の翻訳法としては一機軸をひらくものといえようか。晁氏の詩に対してけたのしいが、孟郊の詩の場合には、やや饒多なことばが原作の濃棘と合いくいのではないかという気がするのだが、どうだろうか、さらに教えを乞いたい。

▲雑記・55 V 字 号

1973.5.29

近重真澄『安井隱居集』卷二に「長言并序」がある。もとは漢文である。

近時の邦制、士人に名ありて字、号なし。その字、号あるは、実に私道にかかる。西鄰と同

荆×田三

じからざるなり。しかるに邦儒同往々彼に泥み、他人のわが字、号を称せざるを見て怒る。もとより謂われなきのみ。またあるいは權八・甚六等の名をもつて斥けて通称となし、みずからこれを称するを耻す。人をして殆んどその親より授かりし嘉名を非とするかと疑わしむ。尤し笑うべきなり。ただかの西郷にかえて、韓子助後漢高渠亦春秋孫家駒劉受二明字長吉唐向子平漢三旦八元等あり。邦儒はすなわちこれを見て怪まず。前後矛盾、もしもまた何の謂ぞや。親の授けし吾が名は服膺すべし。長吉をもつて通称と斥くるなかれ。訝し他の字号はもと私送なるに、人これを用いざれば何じ且つ憎む。

徳川時代の人の隨筆に似た説を讀んだような氣もするが、思い出さない。

近重氏は京都安井の人。京都帝國大學理學部教授で化學教室を主導し、退隱して詩禪に遊んだ。ここにあげた葉は昭和十四年、弟子たちが七十壽を記念して刊行した。袁德堂（金鏡）、内藤湖南、王靜安（國維）、服部權風、木兩向陽、田保橋皓堂、久保田理堂（鼎）、掃田靜處、吉原古城、荒木鳳岡、鈴木豹軒、狩野碧山、沈曾植の題辭がある。詩は漢易で寺黃といはれとんどかわりがない。科學者の目がときどきおもしろい表現をとることもある。この人の葉は多く、他に二部目を通した。題辭をかいている人で、袁、田保橋、久保田、吉原の四氏は、この葉ではじめて名を知った。

A 雜記・56 V 高軒過 白玉樓

1913.6.30.

四月二十五日の日記に神田喜一郎「日本における中国文学」IIから次の記事を書きめいている。寧斎け名を式、字を覺卿、通称を一太郎と称した。年少の詩人である。肥前諫早の人。父を

松陽といつたが、河野鉄兜の高足として、幕末から明治にかけて、詩壇に於ける一重鎮としてゐる人物である。寧斎は夙に庭訓を承けて、少年時代から寧懸兜の譽高く、作詩に異常の天才を示し、槐南の門に入るに及んで、いよいよそれに研習を加へた。明治維新の元勳副島後臣が、彼の才を愛し、或る日突然に寧斎の寓を訪れ、それに感激した寧斎が早速に李長吉の「高軒過」の詩讀に次した。

遠樹衝雨綠楊花 短檠鉄馬声曉曉 高軒一過盛誼隆 驚瞻紫氣連天紅 隲人不識前相公
温容下士披心胸 大雅扶輪方寸中 秋門桃李才不空 文章要補前勳功 小子陋巷坐幽蓬
棧傾階仄寒秋風 邀公目送天外鴻 絳松孺姪如游龍

の一首を賦して呈したことは、明治詩壇の佳話として今日尚ほ世に伝へられる所である。寧斎と口野口寧斎のことである。詩人として、おそらく明治のもっともすぐれた一人である蒼海・副島種臣と、俊才寧斎との、この出会いは、韓退之と李長吉とのそれになぐえて不似合ではない。即座に賦したこの作も佳話としてうたいやされるにふさわしい。

ところで、村上仏山の「仏山堂詩鈔」巻上の「岬岬川翁招飲席上分韻賦呈」は「文章吐出氣如虹」の句でけじまる。これも李翼の「高軒過」から出たのだが、この程度の本歌取りは明治の詩では珍らしくなく、幕末の詩にもかなりあったように思う。

週金井秋蘋故舊 海雪 手島知徳
三嶽嶽嶽出白雲 林莊寂歷倚斜曛 中天鶴唳秋將老 古道蟬響酒不醺 金洞笑靈長護宅 玉